

福島復興の象徴としてのフラガール

—映画『フラガール』がもたらしたものは—

小幡 祥子

はじめに

戦後の風景がまだ残る昭和30年代から40年代にかけて、当時、本州最大規模を誇った常磐炭鉱も石炭産業の斜陽化の波には勝てず、存亡のふちに立たされた。常磐炭鉱は起死回生を懸け「スパリゾートハワイアンズ」の前身である温泉娯楽施設、「常磐ハワイアンセンター」を開業する。閉鎖の迫る炭鉱の町を救うため、北国をハワイに変えるというプロジェクトのもとに「フラガール」たちは誕生した。

福島県いわき市にある「スパリゾートハワイアンズ」の人気者であるフラガールたちのショーは、今やいわき市のシンボルとしてだけでなく、福島のシンボルとして人々にとらえられている。「フラガールズ甲子園」(全国高等学校フラ競技大会)という大会も2011年からいわきで開催されているように、今日本でフラダンスというと、福島のフラガールをイメージするだろう。その理由としては、2011年3月11日に起きた東日本大震災を受けて、フラガールたちが「全国きずなキャラバン」と題して被災したいわき市や県内の避難所を慰問し、その後全国を回り、福島が元気であることをPRしたということが考えられる。

これについては、映画『がんばっぺ フラガール!～フクシマに生きる。彼女たちのいま～』¹⁾に詳しい。今まさに、彼女たちは復興の象徴としていわきの地で踊っている。その様子をドキュメント形式にしたのがこの映画である。そしてこの映画の冒頭で、もう一つのフラガールの映画が引用されている。

それが映画『フラガール』²⁾である。2006年に公開された映画『フラガール』は、フラガールの誕生から、立派なプロとして舞台上に立つまでの成長と、それを取り巻く周りの人々の姿が描かれている。映画となったきっかけは、プロデューサーの石原仁美が偶然見ていたテレビ番組で彼女らの誕生の経緯などを知ったことであり、「こんな面白い話が眠っていたなんて。これは作品になる」と直感したそうだ³⁾。

現在「スパリゾートハワイアンズ」は震災を乗り越え開業し、お客さん

に元気を届けているフラガールたちだが、ここまで有名になった背景には震災だけでなく、映画『フラガール』公開の影響があることを忘れてはいけない。本稿ではそうした状況に映画『フラガール』がもたらした影響について考えてみたい。

震災後の全国キャラバン

まず、震災後の全国キャラバンについてみてみよう。(これについては、本書稲垣論文も参照。)

3月11日に起きた大震災と、さらにその一ヶ月後に起きた震度6強の地震によって建物が壊れ、スパリゾートハワイアンズは休館する事態に追いこまれた。原発事故の影響は大きく、福島を含む東北は危険な地域、近寄りたくない場所と認識され、観光客は次々に旅行をキャンセルした。しかしこのままではいけない。なんとか町を復興させなければならない、人々に笑顔を届けるのが私たちの役目だ、という思いから立ち上がったのがフラガールたちである。

フラガールたちは、スパリゾートハワイアンズの営業再開がまだなされていない2011年5月3日から、いわき市内の避難所からスタートし、東北から九州の26都道府県と韓国の計125カ所で公演をした。

このキャラバンは大成功に終わったが、しかし、そこに至るまでにはさまざまな葛藤があったようだ。なぜなら、彼女たちもまた被災者であったからである。たとえば、サブリーダーの大森理恵の実家は福島第一原発から2キロのところにあったそうだ。

実は『フラガール』の公開以後、フラダンサーたちへの注目は一気に上がり、ダンス以外の様々な雑務に忙殺される状況があったと言われている。震災後もマスコミから、警戒区域に実家があるフラガールはいないか、という取材があつて、大森はその取材を受けるのに非常に抵抗があつたそうだ。しかし、姉の一言で目覚める。「何いつているの。あんたがしっかりして、自分たちがいまどんな状況に置かれているのかしっかり発言して、知ってもらわなくちゃダメじゃないの。そうすることが、あんたの役目じゃないの？」⁴⁾彼女はこうして、福島の状態を発信しようとする。

そのキャラバンを行つたうちの一人、プアリリア樹のインタビュー記事がある。

これまではお客様のほうからハワイアンズに観に来てくれていましたが、キャラバンは受け身ではなく、こちらから思いを発信してい

なければいけません。これまでもそういう心構えがなかったわけでは
ありませんが、よりいっそうお客様の気持ちを考えながら踊るように
なりました。⁵⁾

また、メンバーの一人で、姉もフラガールだったという酒井裕里もこの
キャラバンについて語っている。

みんな被災して、元気をなくしているから、私たちがテンションを上
げられたら嬉しいなと思います。でも、いわきの避難所で暮らしている
人の前で踊るなんて、必死で生活している人たちに、へらへら踊ってい
ると思われるんじゃないかと心配だったんです。だから、「すごくよか
った」と言われた時は、嬉しかった。皆さんから「ありがとう」って言
われることで、私たちも元気をもらっています。⁶⁾

このように、フラガールたちは不安を抱きつつも、無事キャラバンを大
成功させた。2011年10月1日の一部施設を除く営業再開のときには、数
百人の列ができており、中には全国キャラバンを見てわざわざ駆けつける
人もいたようだ。それは彼女たちが『フラガール』で上昇した知名度とい
う遺産を引き継ぐことに成功した瞬間だ。

では映画『フラガール』が残した遺産とは具体的にはいったいなんだっ
たのか。

映画『フラガール』が語ること

映画『フラガール』を見てみよう。チラシの文句に「炭鉱の危機に立ち上がれ!」と
あるように、映画ではさびれつつある炭鉱
の町を救うフラガールたちの姿が描き出さ
れている。当時は炭鉱への思いが強い人々
が多く、彼らは「常磐ハワイアンセンター」
の開業はもちろん、フラガールへも冷たい
視線を向けていた。炭鉱業のような過酷な
肉体労働こそが仕事だと考えていた人々には、
ダンサーというのはへらへら笑って踊
るだけだ、とその存在を批判する声が多く、
東北のハワイ化への風当たりは非常に強か
った。

映画『フラガール』チラシ



そのような中、東京から招いた先生とともに、町を救うために、家族を救うために、フラガールたちがひたむきに練習を積み重ねる姿が映画で描かれている。「彼女たちは、町のため、家族のため、そして自分の人生のために、ステージに立つ」とは、予告編で語られた映画のキャッチコピーである。さらにフラガールだけでなく、炭鉱従業員から常磐ハワイアンセンター職員になった人々も、開業に向けて寝る間も惜しんで業務に励んでいた。そんな姿を見て、ハワイ化に反対していた人々も町の再生のために協力するようになり、ハワイアンセンターは無事開業することができ、フラダンスショーも大成功に終わった。これが映画の大団円となる。

では、この映画が上記のような物語によって、どのようなテーマを描いているのか具体的に見てみよう。この映画はなぜヒットしたのだろうか。

映画の最も印象的なシーンは二つある。一つはフラガールの一人の父親が炭鉱の落盤で死んだとき、フラガールズたちが自分たちの意志で踊り続けることを決意するシーンであり、もう一つはその責任を取って東京へ帰るといふ先生を、フラガールズたちがフラを踊って引きとめるシーンだ。

特に後者は映画のクライマックスで、ここではセリフはなく、以前先生に教えてもらった“TO YOU SWEET HEAT ALOHA”を全員で踊るのだ。振りの一つ一つに意味のあるフラダンスの中でも、これは恋人への愛を伝えるものであり、意味は次の通りである。

あなた 愛しい人よ 愛を込めて 愛しています 体中で 心の底から
笑顔は絶やさないで あなたのその唇に 涙は拭って もう一度
愛しています

映画の中でも、盛り上がりの中心と言ってもよいだろう。

また、映画全体を貫くのは、フラガールである娘の真剣に踊る姿を見て、ハワイ化計画に反対していた母が気持ちを改め、町の人々に協力を呼びかけてゆくというものだ。さらに、同じ町の仲間のそのような一生懸命な姿を見た人々は、しだいに協力し合って町の再生に取り組み始める。

こうした印象的なシーンを見てみると、これらは、震災以後の状況を予言しているようだ。例えば父の死のシーンは、事故によって肉親と死別した女性が立ち直ってゆくシーンであり、まさに震災後の人々の状況と重ねて見ることができるだろうし、他のシーンは、「絆」という言葉は使われていないが、原発事故後の今では、家族の「絆」や人々との「絆」と読み取ることができるシーンである。

逆に、素人であった女性たちが苦勞してダンスを身に付けるシーンはテ

ンポ良い映像で流れるように語られる。ダンスを身につけるのは並大抵のことではないので、映画としてはそうした過程に焦点を当てることもできたかもしれないが、それは意外とあっさりとしており、映画で重点的に描かれているのは、やはり、先に述べたように、家族が葛藤しながらも最後はフラガールたちを応援してくれたことや、フラガールの父の炭鉱での落盤死に際しても公演を続けたこと、そして東京に帰ろうとする先生を習ったフラダンスで引きとめることなどである。

震災がなければ、この映画は、周りから反対されても踊り続け、プロのフラガールへと成長する普通の田舎の女の子たちの姿を中心に、努力を惜しまないことや、あきらめないことの大切さを描く、成長の物語として受け取られたであろう。実際、これを、「素人が猛特訓して最後に何かを成し遂げるコメディタッチの映画」「ベタ」として、『ウォーターボーイズ』（2001）や『スウィングガールズ』（2004）と同じカテゴリーのものとする意見も見られる⁷⁾。

しかし震災後、そしてキャラバン以後のわれわれには、この映画は、危機にある町を救う少女たちと周囲の人々の絆を感じさせる映画となっているのではないか。確かに、この映画はベタな作品だとも言える。しかし、そうした「ベタ」なシーンがあったからこそ、この映画は震災後に思い出され、語り直され、フラガールたちの全国キャラバンや映画『がんばっぺフラガール!』につながっていったのではないだろうか。つまり映画『フラガール』が残した遺産とは、単にヒットして彼女たちの知名度が上がったということだけでなく、震災後の状況を予言するかのようなシーンが描かれていたことともいえるのではないだろうか。

おわりに —映画がもたらしたもの

フラガールたちは人々から愛され、今や福島を代表する存在となった。映画『フラガール』が与えた影響はとても大きく、公開翌年のスパリゾートハワイアンズの入場者はオープン以来最多の161万人に達した⁸⁾。これはフラガールたちの存在が全国に広まったと言ってよいだろう。ここまで有名になった背景には、以上のように映画の存在が大きく関与しているのではないだろうか。震災後は、「絆」という言葉がとても大切にされた。そして復興には、あきらめない心や、助け合いがなくてはならないと一般的には語られている。これらのことは、すでにみたように映画『フラガール』で表現されていることとぴったり重なる。

先にいわゆる「ベタ」なシーンについて書いたが、これらのシーンに代

表されるように、映画『フラガール』は、震災後に人々が求めるものを満たしてくれる作品だったのだ。それによって、フラガールは被災地でも全国でも受け入れられる存在となったのだろう。映画『フラガール』のこうした遺産があったからこそ、彼女たちは震災後の福島の復興の象徴となったのではないだろうか。

長い歴史を眺めると、フラガールたちは、炭鉱が閉鎖されたときと、東日本大震災が起きたときの2回いわきを救ったのである。しかし2回目である震災後においては、映画『フラガール』の存在なくしては語ることができないことがわかった。炭鉱町いわきの町の衰退と復活という歴史の積み重ねが映画『フラガール』に凝縮され、しかしその中で人々に受け入れやすいエピソードが選び出されて、脚色されて描きだされたことで、彼女たちは震災後の福島の復興の象徴になり得たのだ⁹⁾。福島の象徴となった今、フラガールはより一層地域を支える存在となっていくだろう。

注

- 1) 2011年10月29日公開、小林正樹監督。この映画は、震災から営業再開までのスパリゾートハワイアンズとフラガールたちを追ったドキュメンタリー映画で、ハワイアンズの被災状況や、避難してきた近隣住民の姿、全国キャラバンに向かうフラガールやファイヤーナイフダンサーの様子をとらえながら、中盤からはフラガールのサブリーダーで被災者でもある大森梨江の描写が多くなる。一見映画『フラガール』とあまり関係のない、震災に関することのみ映画かと思われるが、ナレーションは『フラガール』で主人公の一人を演じた蒼井優が担当し、小林監督も『フラガール』のメイキング番組の監督である。ドキュメンタリーの最後の営業再開時に踊られたダンスは映画『フラガール』のラストシーン(開業時)のダンスと同じで、かつての開業と営業再開が重ねあわされているようだ。この映画によるこうした引用によって『フラガール』がより震災と結びつけられただろう。なおラストでは『フラガール2』というキャプションもみられる。
- 2) 2006年9月23日公開、李相日監督。
- 3) 『読売新聞』2012.7.10
- 4) 清水一利『フラガール 3.11 つながる絆』2011 講談社 pp. 106-107
- 5) 「プアリアア樹 フラダンスに思いを込めて、スパリゾートハワイアンズによる『全国きずなキャラバン』」『家の光』2012.2 産業組合中央会 pp. 67-70
- 6) 「密着フラガール『復興ダンス』と悲しい現実」『Friday』2011.7 講談社 pp. 29-31

- 7) Yahoo 知恵袋『フラガール』『ウォーターボーイズ』と同質の映画を教えてください」という質問。http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1098327485。また、同様のことを書いた「映画『フラガール』と『スウィングガールズ』」というブログ記事もある。http://blog.goo.ne.jp/hottinroof/e/cc315e3a17355d94ca91c5a8b5f0ee96
- 8) 前掲『読売新聞』
- 9) 例えば「観光夏祭りは復興への起爆剤。被災企業の期待は大きい」『週刊東洋経済』6327号 2011. 5. 28 東洋経済新報社 pp. 46-47 や、「風評の払拭に立ち上がったフラガール」『週刊ダイヤモンド』2011. 11. 26 ダイヤモンド社 pp. 122-123、など参照。

今ではフラガールを目指す女性は多く、2年の課程を修了すればプロにすることができる常磐音楽舞踊学院の倍率は3倍に及び。学院の発足は1965年4月。翌66年1月15日の常磐ハワイアンセンターの開業まで10か月もなかったが、練習はバレエの基本練習から始まった。

当時の練習について、1期生は皆「大変でした」と口をそろえる。講師であった早川和子さん(カレイニナ早川さん、『フラガール』で松雪泰子が演じた平山まどか役のモデル)は、当時33歳。28歳でハワイに留学してフラダンスを学んだ。父が教育者だった早川さんは礼儀を重んじ、皆が一生涯懸命やっている時に遊んでいるような生徒には容赦なくバケツを持たせて立たせることもあったようだ。

「大変でした」の言葉の中には、さまざまな苦勞が含まれていることだろう。私は7年間バレエをしていたこともあり、フラダンスがバレエを基礎にしているということに興味を持った。バレエは日常生活では使わない筋肉を使ううえ、バレエでの正しいポジションは、バレエをしていない人にとっては不可能と思われるようなものである。(足を股関節から外に向けるなど)私自身も7年間かけて正しいポジションへと近づくことができた。したがって、当時フラガールになろうとした人々は、何も土台がないまま基礎としてバレエを始めたことによりかなり苦戦しただろう。まだ幼い頃に始めたなら、体も柔らかくなりやすく吸収も早かっただろうが…

現在私は大学のダンスサークルに所属しているが、ここではバレエを基礎に、ヒップホップや創作ダンスなど踊っている。部員はダンス経験者と未経験者が半々ぐらいであり、大半がバレエを始めて体験することになる。そこでの部員の様子を見ると、ヒップホップなどの習得は早いですが、バレエはかなり苦戦している。バレエはやはり難しいのだと再確認した後にフラとバレエの関係を知ったので、フラガールが苦勞した気持ちが少しわかるような気がした。

小幡祥子